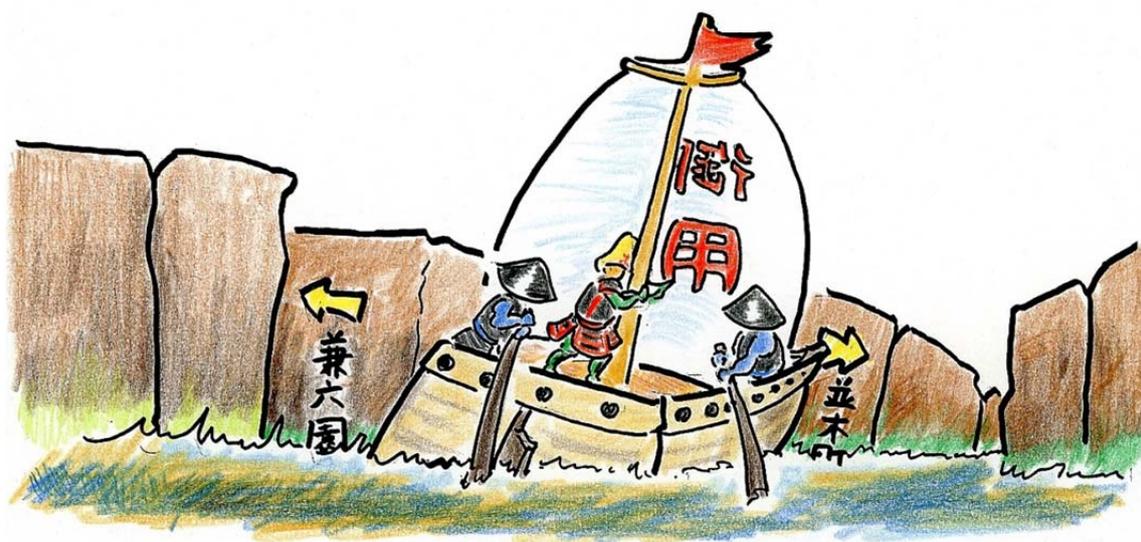


支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.17

ご助を探して勢いよく番小屋を飛び出した拙者じゃったが、強い南風の中、飛び交う空き缶やペットボトルを避けながら陸路を観音町へと向かうのは危険と判断し、兼ねてから懇意にしておった深川奉行の速水右近様、別の名を萬屋様の錦之介殿にお願いし、辰巳のお堀に早船の御用船を浮かべると源太郎川へと漕ぎ継ぎ、東兼六、横山と下って、橋場町は金城楼の裏で御用船を降りると一路浅ノ川左岸に至り、はちろう寿司の前から梅の橋へと駆けあがったのじゃ。



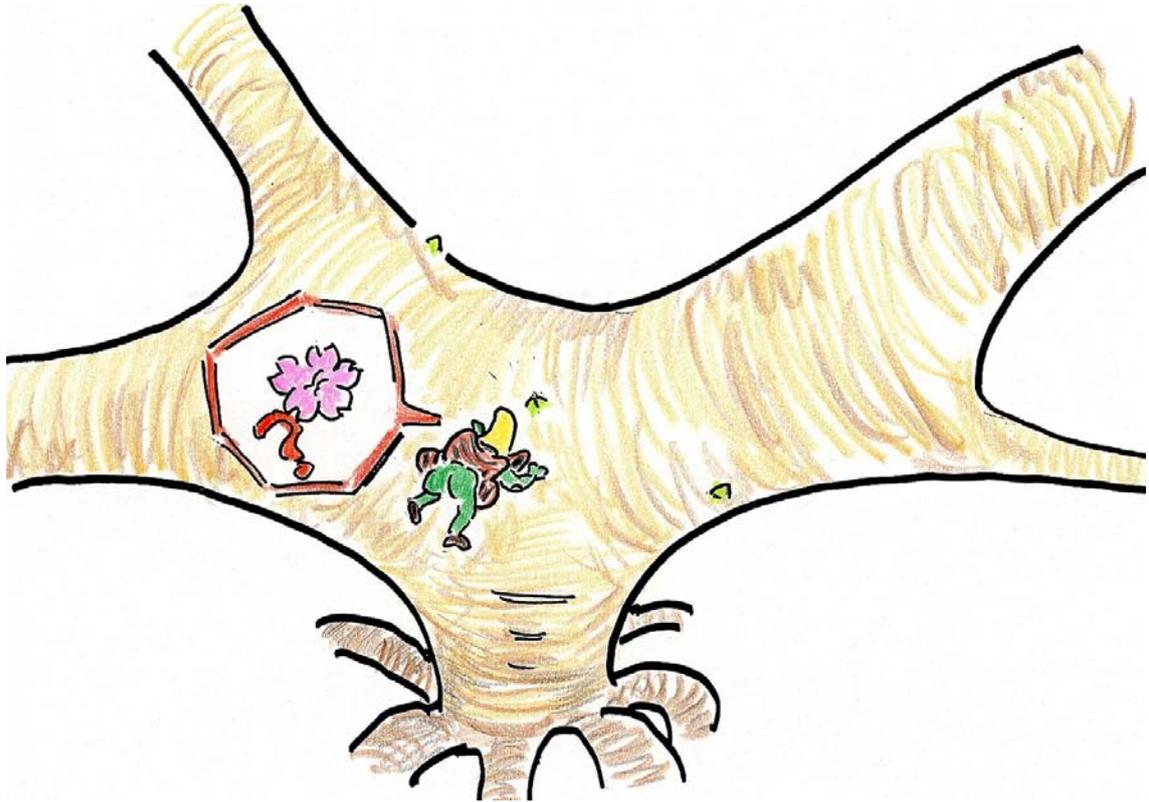
「ご助え、ご助えっ。聞こえたら返事をせよ。ご助え・・・。」とあらん限りの大声でご助の名を呼んだのじゃが、一向に返事は返ってこなかった。



「致し方なし。」拙者は覚悟を決めると昼間ご助が登っておった桜の木を、強風のなか登り始めたのじゃ。

「ご、ご助・・・今助けに行くぞっ」 ともすれば萎えそうになる心を叫び声で振るい立たせ、ご助が指差していた蕾にたどり着いたのじゃが、ご助の姿は無かった。

「ご、ご助め。吹き飛ばされたのでは・・・。」と不安に駆られながら蕾を今一度見れば、蕾は未だ固く咲く気配など微塵もなかった。



「お、おのれご助め。拙者をたばかりおって、あんな奴もうどうなってもしらんわい！」と腹を立てた拙者の下を一台の消防車が

『こちらは駅西消防署です。火災警報が発令されました。火のもとに十分・・・』

と広報しながら近づいてきたのじゃが、その声は突然の

『こちら金沢消防・・・第二方面〇〇町・・・で一般建物火災。』という消防無線にかき消されたのじゃった。

「な、なに！〇〇町？お屋敷か？」と判断するいとまもなく、拙者は消防車の屋根に飛び移っておった。



暗闇の中、疾駆する消防車。

その上で「早う早う早う」とサイレンにしがみ付きながら拙者はお屋敷が無事であるよう祈り続けたのじゃ。

およそ5分後、現場近くに着いた消防車のサイレンが消え、同時に

『ただ今の出動は近くの公衆電話からの通報で偽報ぎほう（意：うその通報）。』と流れる消防無線を聞いた拙者は「偽報か、ま、まずは良かった。」と消防車か

ら飛び降り、お屋敷へと急いだのじゃった。お屋敷の前では、近所の方々にまじって、主様に奥方様と姫様が心配そうに道路に出ておったが、やはりご助の姿は見当たらなかった。

「とにかく皆様が無事で何より。」と喜んだのもつかの間、突然あたり一帯が停電になったのじゃ。

暫くして誰かが

『強風で近くの送電線が切れてんと。電力が向かっとると消防さんがゆうとつたわ。』と

言うのを聞いて、近所の方々は三々五々、それぞれのお宅へと帰られたのじゃった。



「何とも忙しい日じゃったの。」と一度は番小屋に戻った拙者じゃったが、電気が復旧した後の電化製品が気にかかり、再びお屋敷へと入っていったのじゃ。



主様ご家族は非常用の懐中電灯をつけ寝室でお休みになられたようござった。

「電気ストーブのスイッチは・・・off じゃな。オーブンレンジもよし。アイロンも OK、ドライヤーは・・・それ見よスイッチが入ったままじゃ。危ない危ない・・・スイッチ off と。」という具合に各部屋を点検していったのじゃ。

「あとは座敷じゃが、こう暗くては足元がおぼつかん・・・。うん？なんじゃ？」

縁側から障子越しに見る座敷の中が^{ほの}灰かに明るい。



「ぼんぼりの明かりかの？電気が復旧したのじゃな。」と一人合点し拙者は障子を開けたのでござる。

しかし、そこで目にしたのは、理解するまでに相当の時間を要するおぞましい光景じゃった。なんと、障子越しの明かりはぼんぼりなどではなく、頭に口ウソク立てを着けた何者かが・・・。

「や、八墓村の祟りか？」と一瞬ひるんだ拙者でござるが、直ぐにどこかで見つめたような後ろ姿に気が付きましたのじゃ。

間違いなくご助でござった。

「ご、ご助、おぬし無事だったのか！」とご助の無事を喜んだ拙者の声は次の

瞬間

「な、何をしておるのじゃ！！」との叱責に変わったのでござる。

あろうことかご助は右大臣様にアイマスクをつけ眠らせた上で右大臣様の徳利

から「醤油チュウチュウ」を使って花見用の徳利に移し替えておったのじゃ。



「あ、旦那様。もうすぐ終わりますから先に帰っていて下せい。」と悪びれる

様子もないご助に

「馬鹿者。止めんか！甘酒を元に戻すのじゃ。」と怒鳴りつけたのじゃが

「大丈夫ですって。旦那さまにもちゃんとおすそ分けの品がございますから。」

とご助。

「ま、まさか偽の通報をしたのではあるまいな！」拙者の脳裏に先程の消防無線の内容がはっきりと甦ってきたのじゃ。

「偽の通報で主様を追い出してからひな壇の甘酒を盗みおったのじゃろ！！」

と決めつけるとひな壇を駆け上がったのじゃ。



「ひ、ひどい言われようじゃ。いくらあってもそこまで卑劣な真似は出来や

せんぜ！それに虚偽の通報は消防法違反で30万円以下の罰金か拘留ですぜ。

旦那様はあっしがそんなことをすると思いですかい！」とご助が真剣におこりだしたのじゃ。

「いや・・・するんじゃないか・・・と思うたのじゃ。」と拙者が答えると

「やっぱり。やっぱり旦那様はあっしのことを疑ってるんじゃないですかい！」

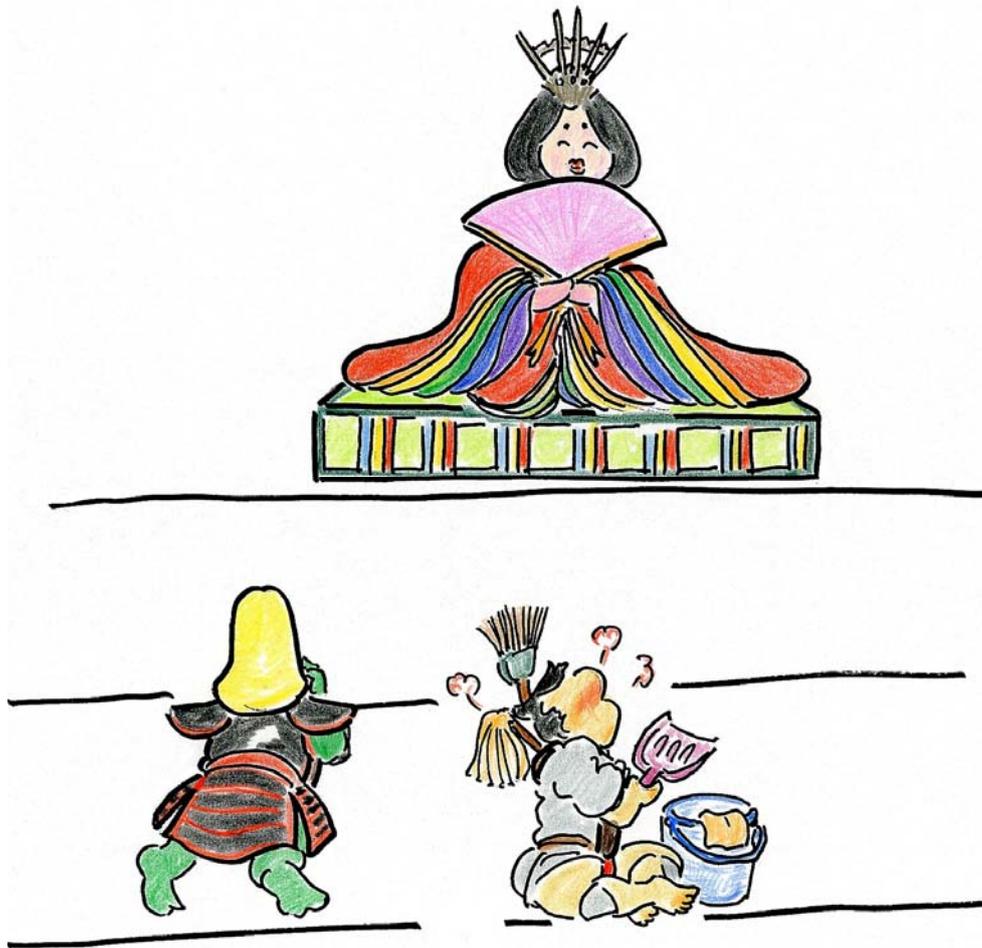
と怒鳴ると

「冗談じゃねえや。あっしはずっとこちらでおひな壇の掃除をしていたんですぜ。」

なんせ一年ぶりのお出ましでしょうから、お掃除の手間賃に右大臣様の甘酒と菱餅を頂きたいとお願いし、お許しを貰ってずっと掃除をしていたんですぜ。」

と続けたのじゃった。

「な、なに？ほ、本当か？」と拙者が見上げますれば、ただにっこりと頷くおひな様。



「・・・で、では何で右大臣様に目隠しを？」と更に尋ねれば

「右大臣様はご自分の甘酒が抜かれるさまを見たくないとおっしゃるから、姫様のハンカチで目隠しをしてさしあげたんでさ。」

「し、しかし・・・あの光景は甘酒を盗んで・・・」

「何でい。あっしをそんな風にしか見ていない支援様など旦那様じゃねいやい！」と

ご助が決定的な一言を口にしたのじゃ。

これはもうお終いじゃな。拙者はご助との主従関係の終焉を覚悟したのでござる。

とそこへ深川奉行がお出ましになり、かなりの高音で

「おう、貴殿とこのご助は見つかったのかい？あの嵐の中を梅の橋まで探しに行くなんざ中々に出来るもんじゃねえ。近頃めずらしく美しい主従関係を見せてもらったぜ。

おっ、なんでいご助いるじゃねえか、無事でよかった。あんまし支援にしんぺえ（心配）掛けるんじゃねえぜ。」というと帰って行かれたのじゃ。

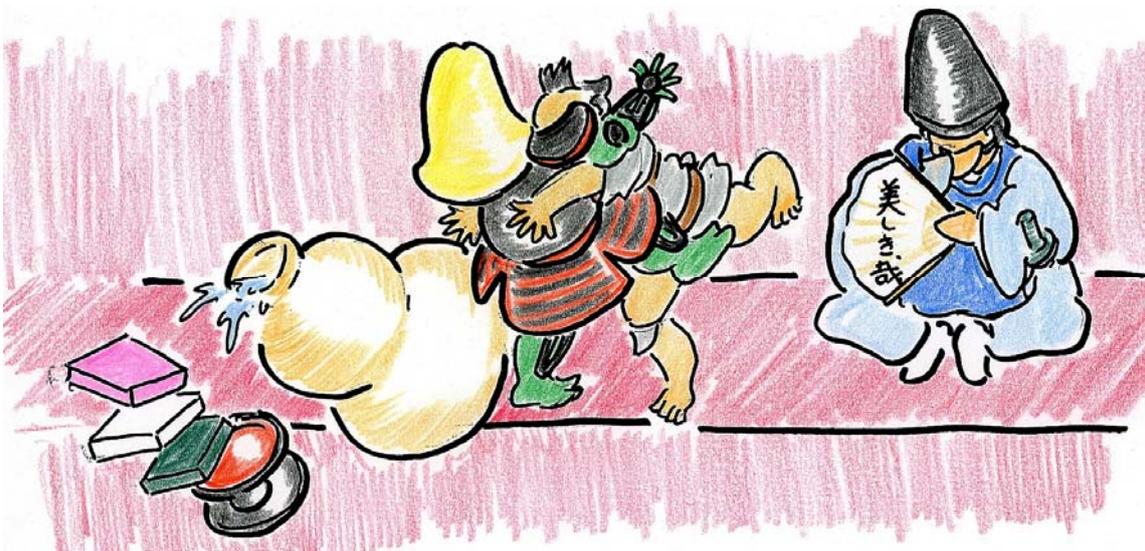


しばしの静寂がありご助が

「だ、旦那様・・・あっしを探して梅の橋まで・・・あの嵐の中を・・・」と

「な、成り行きじゃ・・・放ってはおけん・・・」という拙者の話を遮り

「旦那様あ！」とご助がすがりついてきたのじゃ。



「わっ、ご助っ！危ない！」不安定なひな壇の上でご助が急にすがりついたものじゃから、バランスを崩した拙者とご助は折角移し替えた甘酒の徳利と菱餅ともども座敷の畳の上へと転げおちたのじゃ。

「馬鹿者めが！ああっ折角おひな様から頂いた菱餅が！」

「ああっ、旦那様何をしてるんでさ！家来の一人も受けとめられねえんですか

い！

あっしの甘酒がああ。」

「なにを」

「なんでさ」

キッ と互いににらみ合った拙者のご助でござったが、次の瞬間

「はははは、良かったのご助。」

「へへへ、何が良かったのかわかりやせんが、まあ良い気持ちでさ。」

と笑い合うと畳の上にこぼれた甘酒でふやけた菱餅を抱えると

「さあ番小屋へ帰ろうかの。」

「へい旦那様。」

と仲良くお屋敷を後にしたのでござる。

.....はて？ 畳にこぼした甘酒は 大丈夫なのかな？.....



(おしまい)